

# 巻頭論文



東北福祉大学教授  
有田 和正

## ◎プロフィール

筑波大学附属小学校を経て愛知教育大学教授（平成11年3月停年退官）。教材・授業開発研究所代表、東北福祉大学教授。

著作集23巻をはじめ平成18年7月現在164冊、授業論、教材論、社会科論、生活科・総合的学習に関する事、ユーモア教育に関するものなど幅広く執筆。今、エネルギー環境教育にも関心をもっている。

「授業力アップ術」

## (1)教師はみんな授業力を高めたがっている

学力低下は、明らかに「授業力の低下」が原因である。平成17年度、約900学級の授業を参観して、「これでは学力が低下しない方がおかしい」と思われる授業が、かなりあった。どうしてこんなに授業力、指導力が落ちたのだろうか。

その原因追究よりも、ここでは、「どうしたら授業力をアップできるか」と、積極的な方向で考えていきたい。

なぜなら、原因調べをしても何のプラスにもならないし、授業もうまくなならないからである。

多くの教師たちは、「子どもがわくわくするような面白い授業をしたい」と考えている。

そのことは、研究会などに行ってみるとよくわかる。ただ、アップする方法、内容がわからないでいるのである。

## (2)「授業とは何か」考える

基礎学力をきちんとつけるには、何よりも教科書をきちんと教えることである。ただ、この「教え方」が問題なのである。

わたしは、サプライズのある教え方をするとよいと考えているし、自分もそんな授業を行っている。

「頼朝は、鎌倉に幕府を開いた」と教えれば、子どもは、「はいそうですか」で終わっている。そこで、「頼朝は、鎌倉に幕府を開いたのだが、その理由は何だろう?」と問題を含んだ問いかけをすることだ。

つまり、「教材研究」が不足しているのである。深く教材研究をすれば、自然に「発問・指示」が出てくるし、「どんな資料をつくれればよいか」ということもわかってくる。

いうならば、「教材の背景」まで深く追究することである。そうすれば、平家が貴族のまねをして滅びたので、鎌倉に貴族とは関係のない幕府をつくらうとしたことがみえてくる。

鎌倉幕府をつくるため、つまり平家を倒すために活躍した義経をさえ殺さなくてはならなかった頼朝の考えがみえてくる。義経は朝廷方の検非違使になった。これを幕府への反対ととらえられた。これを許せば鎌倉幕府の中のけじめがつかなくなる。

頼朝は冷たいといわれるが、そうしなければ鎌倉幕府の秩序がくずれるし、みだれる。頼朝の苦しさがわかるような気がする。

こんな「背景」まで（教科書に出ていることの）つかみ、これに、サプライズをおこすパフォーマンスなどを取り入れると、がぜん面白くなる。

わたしの場合、教材が完全に自分の手の中に入ってくるまで調べる。そうすれば、「発問・指示」だけでなく、「資料」もどんなものが必要かみえてくる。

それだけではない。どんな「板書」をすべきかもわかってくる。つまり、「これだけは何としても教えなくてはならない」ということが、「板書」という型でみえてくるのである。

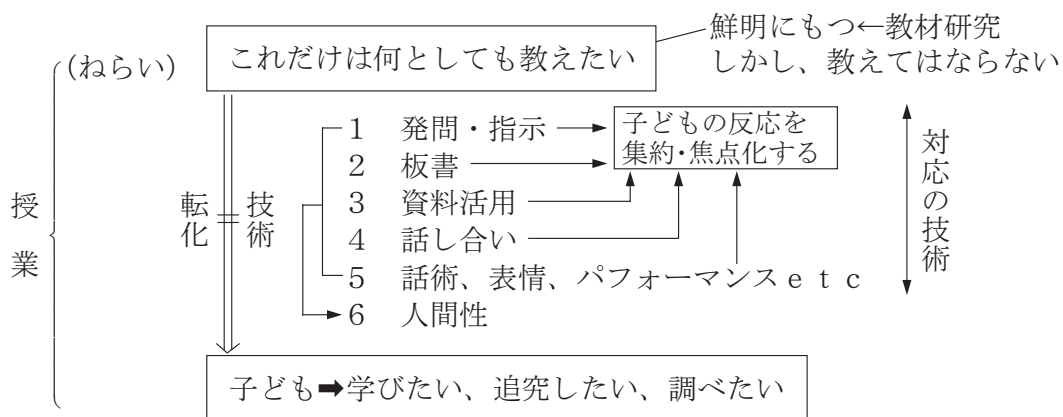
だから、わたしは、よく「板書計画をしましたか?」と聞く。殆んどなされていない。いきあたりばったりである。

「発問・指示」をすれば、「子どもの反応」が出る。これを、話し合いながら、「集約・焦点化」するのである。この焦点化された学習問題を更に話し合い、考え合って深めるのである。

この時必要な技術が、教師の「話術・表情・パフォーマンス」である。これらの技術を使って面白く話し合い、新しい結論を導き出すのである。

この時、どうしても出てくるのが、教師の人間性である。暖かい雰囲気をもつ人間性の教師であれば、たのしく明るい話し合い学習が展開されるが、ネクラの教師のもとでは、お通夜のような授業になる。

今までのことをまとめてみると、次の図のようになる。



### 「授業」とは何か

(有田和正の授業力アップ入門 ー授業がうまくなる12章ー 明治図書 24ページ)

教師の技術の粋は、「対応の技術」といってよい。これがあれば、子どもを楽しく学習させることができる。

わたしは、タレントのさんまの技術に注目している。暇があったらみて、どのようにして対応しているか学んでいる。

## (3)動物園で働く人の工夫

「授業力アップ」に欠かせないのが、教材研究力、教材開発力である。このことを、わたしは、「材料7分に、腕3分」といっている。

7分の材料をみつければ、少々腕が悪くても子どもは動く。もつとも、7分の教材をみつけるのも「腕3分」の中に入っているのだ。

社会科の教材を開発するのに、社会科関係の事や資料をみていたのでは、面白い教材はみつからない。いい例を紹介しよう。

多摩動物公園の石田<sup>おまむ</sup>截氏が「発見の動物園」という文を『そよかぜ通信』（教育出版、2005年秋号）に書いているのを読んで感動した。

石田氏は、国語を扱っている6社の教科書を読み、そこでの「野性動物」の取り扱いの比率は約30%もあることをつかんだ。

さらに、国語の「説明文」の分野での野性動物の比率は、なんと60%に達していることをつかんだ。

こういう研究をして、「動物園は何をすべきか」を考え、教員のための研修講座を開いている。毎年700～1000人もの教員が参加しているという。

国語の教科書の文から、動物園の展示のしかたを工夫したのだ。例えば、キリンを上から見るようになっていたのを、同じ高さのすぐそばから見るように展示のしかたを考えたのである。

これで、キリンの首が長いことや、背が高いという特徴に気づくようにしたという。さらに、こういう展示のしかたで、首をどうやって支えているか、目はどうなっているか、口をいつももぐもぐさせているのはなぜか、といった「はてな？」をもつように工夫したという。

疑問をなげかけ、ヒントを与え、さらに疑問が深まり、観察の焦点が定まってくるのではないかと考えている。「答えは、自分で観察してみつけなさい」というわけである。

まさに、授業そのものではないか。

動物園の見学を、総合的学習のためだと考えていたのが、国語のためであり、社会科や生活科、図工などの学習のためでもあるのである。

教科と総合がより深く関連し合っていくことによって、両者とも深まっていくことを、動物園の例は証明しているといえる。

授業力がアップしないのは、生活・総合と教科との関係が足りないことも原因の1つである。

両者のかかわりの中心をなすのが「はてな？」発見力であり、「見る力」であり、「ことばの力」である。すべてはここに収れんされるのである。

#### (4)教材の背景を調べるには

国語でも社会でも、教材研究は、それと直接関連することだけを取りあげる傾向が強い。これでは、本当の背景まで研究することにならないことを前節でみてきた。

わたしは、今社会科以外の本を読んだり調べたりしている。そのことが社会科の学習に関連していることに気づいたからである。

ミミズのことを研究したり、ザリガニのことを調べたりしているうちに、社会科との関連がみえたりする。こんなとき、面白いなあ、世の中ってすべてつながっているのだな、と思う。

みつばちの本を読んでいたら、「これは人間社会と同じだ」と思うことが沢山あった。授業力を鍛えるということは実に奥が深い。